

みなさまいかがお過ごしでしょうか。今年の花まつり講演会は中島岳志さんでした。

中島先生は外語大学でヒンディー語を学ばれました。お釈迦様が生まれ、仏教が興ったインドの言葉です。ヒンディー語には与格という文法格があります。【私はあなたが好きです】というときに【私の中にあなたが好きという感情が入ってきて留まっている】というのです。自分の意志で相手を好きになったということとはニュアンスが違います。【私】という入れ物の中にどこからか【あなたが好き】という感情が入ってきたような表現です。私たちは全てを自分の意志や自分の力で決定しているように思いがちですが、インドでは【自分】とは入れ物のようなもので、言葉や感情はどこからかやって来てその入れ物の中に留まり、【自分】はそれを次に引き継ぐ存在、という感覚があるようです。

浄土真宗においての【他力】もそれに近いのかも知れません。親鸞聖人は自力を徹底的に否定されました。私たちの信心でさえ阿弥陀如来のおはたらきによって私に届いてくださっていたのだきものなのです。

行事予定



五月二十四日 光圓寺 春季永代経法曹

二十五日 講師 高松秀峰師

七月 十三日 まこと会 夏法座

十月 十七日 まこと会 念仏奉仕

十月二十五日 報恩講・秋季永代経法曹

二十六日 講師 吉崎哲真師

*今年のお齊当番は南観音東地区の方々です

よろしく願っています

*四月よりヨガの会が月2回になりました

ご興味のある方はぜひご参加ください

フェンスが完成しました

昨年より隣寺との境界塀を新しくするフェンスの設置工事を行って参りましたが、おかげさまで、無事に完成いたしました。工事期間中には立入制限などご不便をおかけすることもありましたが、皆さま快くご協力頂き、ありがとうございました。

また、ご寄付のお願いは、いたしませんでしたがにも関わらず、ご配慮いただきました方々には重ねて御礼申しあげます。



無力のちから

四月八日はお釈迦さまのお誕生日です。

毎年広島市の浄土真宗寺院が集まって、祝賀行事を行っています。

今年の祝賀公演会は、政治学者の中島岳志さんの講演でした。

中島さんは昭和五十年生まれで、ちょうど二十歳の時に阪神大震災を経験されます。激しい揺れと炎によって街は壊滅しました。自分の命を守ることが精一杯の時、その瓦礫の中を一心不乱に仏壇を探すおばあさんの姿に衝撃を受けたといいます。そのおばあさんの中に確固とした宗教の心を感じたのです。財布一つしか持って逃げることを思いつかなかった自分の中にはその確固としたものがない。その気づきはその後中島さんが宗教に関心を寄せていく一つのきっかけとなりました。数ヶ月後には地下鉄サリン事件も起こります。宗教団体が無差別テロを起こしたことで宗教全体に対して批判や猜疑心が社会の風潮として蔓延しました。しかしその中で中島さんは長い歴史を持つ既存仏教の教えに注目します。いろいろな新興宗教が出来たり消えていったりする中で、長い歴史の波を越えてきた教えの中には普遍的なものがあるのではないか、人間の善悪を超えた救いはあるのか。それはまさに親鸞聖人が説かれた悪人正機の問いなのです。



親鸞聖人は他力を説く中で絶対的に自力を否定されました。

中島先生の初めてのお子さんが、生後数ヶ月の年末に高熱を発症された時のこと。救急病院に行ってもベッドがいっぱいで入院させてもらえません。自宅で奥さまと二人で夜も昼もなく看病をされました。

最愛の我が子が熱でぐったりなっている様子を目の前にしながらも何もできずにただ見守るしかできない。心配と不安で息が詰まりそうになる数日を経て、やっと熱が下がりました。その朝、窓を開けて外の空気を吸いながら鼻歌を歌ったそうです。「青空の梅干しに。パパが祈るとき・・・」その時、泣きたいわけでもないのにポロポロと涙が止めどなく流れ出てきました。自分でも驚きながらも止めることの出来ない涙の中で気付いたのです。自分の無力を感じながら心配で張り詰めた自分の中にあつたものは言葉にすらならない祈りや願いだつたということに。そして無力で空っぽになった私の中に入ってくるのが他力であり、それが念仏なのだ、先生の中にストンと入ってきたのです。最近「葬式仏教」などと揶揄されますが、葬式はとても大切な儀式です。人は死者となり姿形はなくなりますが残された者の中にある記憶や想いは消えるわけではありません。死者となって傍らにいる。その人と一緒に生きていけば良いのです。お葬式や仏事は出会いの日であり約束の日です。お坊さんも大切に勤めなくてはなりません。